

放送人の会

No.71

2015.9.11

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階 Tel & fax 03-3221-0019 Mail info@hosojin.com
 発行 一般社団法人・放送人の会 会長 今野 勉 編集担当 伊藤雅浩 (広報委員長・編集長)、鈴木典之、逸見京子、
 前川英樹 (HP担当)、松尾羊一 事務局 佐藤真美子、須斎恵美子

戦後70年の秋を迎えて

会長 今野 勉

今年の夏は、戦後70年の節目ということがあって、放送も新聞も出版も、例年にも増して、戦争・戦後の歴史認識に関する報道が多かった。中で、私の目を引いたのが、東京・麻布高校生による「私たちの戦後70年談話」だ。

「日本では空襲や原爆の被害者という視点の話が主で、加害行為の検証が少なく、アジア諸国の反感を招いていると思う。真実は何かという共通認識を築くのが、真の和解への大前提ではないか。」

「何をされたか」も大事ではあるが「何をしたか」という視点へ立つことを高校生は日本のマスコミに促しているのだ。

さすがに戦後70年の今年の夏のマスコミは、「何をしたか」の報道を少しは増やしたようだ。例えばシンガポールで捕虜になり、新潟の捕虜収容所で苛酷な労働を強いられ、元オーストラリア兵の話、日本の捕虜収容所での死亡率が27%だったのに対し、ヨーロッパでのドイツ・イタリア兵の捕虜の死亡率は4%であったことが示されていた。

そして例えばシンガポール占領後、日本軍が5千人とも5万人とも言われる反日主義者などを処刑したこと。

反対に「加害者」として日本を訪れた人の話も報じられた。原爆投下を命じたトル

ーマン大統領の孫ダニエル・トルーマンだ。彼は謝罪に来たのではない。「トルーマンの血を受け継いだ者の責務」として広島へ来たのだという。

加害が被害か、という発想から少し抜け出た、ごく普通の庶民の戦中・戦後の生き方の本が存在を知らされたのもこの夏のことであった。(生きて帰ってきた男―ある日本兵の戦争と戦後) 小堀英一・岩波新書。その人は、戦後、ソ連に抑留され収容所生活を送るのだが、所内では民主運動が自発的に起こり、人種差別もなく待遇改善も早く、生き残れた。

シベリア抑留と聞くと苛酷な環境と苛酷な労働で死亡率も高いように思ってしまうが、シベリア抑留の日本軍捕虜の死亡率は10%だったという。日本軍の捕虜収容所の死亡率27%がどのような意味を持つのか、あらためて知らされる。

その人は、中国における日本軍の「南京大虐殺」についてこう語っている。「残虐行為をやった人は、戦争では獣になっていたが、戦後に帰ってきたら何も言わずに、胸に秘めて暮らしていたと思う」。

◆この秋の3つのイベント

こうした多様な報道がなされた夏を終えて、この秋、放送人の会は3つのイベント

を迎える。一つは、「放送人の証言」の刊行に向けての、証言の校訂作業。一つは、放送人の会有志による「安保法制案」に対する声明を出すこと。一つは、「日韓中テレビ制作者フォーラム・釜山大会」への参加。校訂作業は、ほぼ終了に近いが、校訂作業に当たった会員から、予想以上に手間がかかったがこの機会に証言を読むことが出来てその面白さに感激したという感想が幾つも寄せられている。「戦後70年」ということもあって、私たちの「証言」の重さをあらためて感じている。

「安保法制案」に対する声明は、放送人の会が会員すべてに開かれた組織であることと共通認識としたうえで、会員の自由意志の表明であると受けとめている。どのような意思表明であれ、それは歴史に対する各自の責任の取り方であることに変わりはない。

さて、「日韓中テレビ制作者フォーラム」の今年のテーマは「アジアン・フオーマツト」である。戦後70年とは無縁のテーマのように見えるが、それぞれの国の戦後70年の今の放送事情が透けて見えるテーマであるとも言える。

東アジアの放送人もまた大きなグローバル化・リゼーションの中で「ビジネスとしての放送」と「事実を伝えるメディアとしての放送」のせめぎ合いの中で生きていかねばならないのだ。

安全保障関連法案に反対する「放送人の会」有志の声明

「放送人の会」は、放送に関わる個人が、組織・地域・世代・国籍の違いをこえて交流し啓発しあうとともに、市民との積極的な意見交換を図ることによって、放送人の育成、放送文化の継承と発展充実に寄与することを目的とする集まりです。

放送人にとって、「表現の自由」はかけがえのない権利です。戦争になれば、はじめに抑圧されるのがこの自由です。戦後日本の放送は、アジアへの侵略・植民地支配、そして自国民の多大な犠牲という負の遺産を背負つてスタートしました。この14年間、「放送人の会」は、日中韓の制作者の交流の場を通して、加害・被害の溝をこえる努力を続けてきました。

しかるに、安倍政権は圧倒的多数の憲法学者が「違憲」とする「集団的自衛権行使容認」を閣議決定し、「安全保障関連法案」を強引に採決しようとしています。この間の政治家による放送メディアに対する干渉や暴言は目にあまるものがあり、立憲主義、民主主義はまさに危機に瀕しています。

安倍首相の「戦後70年談話」は、欧米列強への「挑戦」の失敗を反省するばかりで、アジアへの謝罪が欠落したものになっています。「戦後」が再び「戦前」に逆行しかねない今、現政権の姿勢を、言論・表現に関わる放送人は見過ごすことができません。

私たち「放送人の会」有志は、現在および将来の放送と放送文化を守るために、安全保障関連法案の廃案を強く求めます。

2015年8月28日

（呼びかけ人）

曾根英一、桜井均、渡辺紘史、村上雅通、金平茂紀、堀川とんこう

【賛同する人】返信数 74、賛同者数 67、賛同者中名前の公表に同意した60名の方のお名前です】

伊藤雅浩 井上佳子 太田昌宏 緒方陽一 小河原正己 荻野慶人 加賀美幸子 各務孝 勝部領樹 加藤滋紀

鎌内啓子 河村正一 北川泰三 北村充史 北村美憲 木村成忠 工藤英博 隈部紀生 河野尚行 小山帥人

今野勉 齋明寺以玖子 坂元良江 佐々木彰 佐々木光政 菅野高至 鈴木典之 鈴木嘉一 須磨章 高橋練

田中直人 田原茂行 辻本昌平 戸田桂太 外崎宏司 中崎清栄 中島僚 永野敏一 長沼士朗 中村芙美子

並木章 西村与志木 林健嗣 藤村忠寿 前川英樹 牧之瀬恵子 松尾羊一 三宅恭次 村上佑一 諸橋毅一

八木康夫 碓井広義 山県昭彦 山崎裕 山路冢子 山田尚 横山英治 吉田賢策 吉村豪介 吉村直樹

會員有志の「声明」に至る経緯

この有志の「声明」を会員の皆様にお送りするに至った経緯は、呼びかけ人から「声明」をお送りした際に、前文として会員宛に会長が書いた説明と基本的考え方にあるとおりです（以下に再掲します*）。念のために付け加えれば、7・25理事会では人会としての見解は出すことは馴染まないとしてしましたが、「声明を出したい」という有志のアクションを否定したものではありませんでした。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

「安保関連法案と放送人の会」

2015. 8. 28.

會長 今野 勉

會員各位

7月25日の理事会において、現在国会で審議中の安全保障関連法案について「放送人の会」として反対意見を表明すべきではないかという提案がありました。理事会では、これについて賛同する意見とともに、「個々人の自由意思による参加で成立している放送人の会としては馴染まないのではないか」等の疑問も提示されました。理事会としては、戦後70年との関係で「テレビは戦争をどう伝えたか」というテーマで番組上映と議論の場を設定し会員が参加することで「会」としての問題提起としたい、という整理が

行われました。

そのうえで、あらためて数名の理事から安保関連法案に対して何らかのアピールが必要であるという強い意向が伝えられたため、8月24日に会長である私を交えて議論を行いました。

そこで安保法案についての意見表明とシンポジウムについて、以下のような方向で対応することで意見の一致を見ましたので、その旨を理事の皆様にお知らせしご理解を頂いたところ

1、「放送人の会」は会員全員が自由な意見表示を行うことができる組織です。したがって、この件についても何らかの意見表示をしたい会員が、会報あるいはホームページ等にその意見を表明し、会員に呼びかけることは会の趣旨に沿うことであると考えます。

2、意見表明に会員個人が賛同することとは自由であると考えます。仮に会員全員が賛同したとしても、それは各個人の意思表示であるということです。

3、その場合、その個人が所属する組織は「放送人の会」であり、その「放送人の会有志」として意見表明がされることは許されると考えます。

4、「安保法案に反対の声明」とその賛同者の名前（名前の公表に同意した者のみ）を会報とホームページに掲載します。

以上の基本的考え方に沿って、別添の「意見表明」を呼びかけ人から会員各位にお送りしますので、別紙用紙で会員の皆様のお考えをお聞かせください。

理事の中にも「有志」とはいえ「会」の名前を使うことについての懸念等の意見がありました。私としてはそうした意見を受け止めた上での判断です。会員各位も「声明」内容だけでなく、会としてのあり方も含めて自由にお書きください。個々人の自由意志、それこそがこの「会」のもっとも大事なことでと考えています。公表のご了解をいただいた会員の意見は会報等で共有し、さらに議論を深めたいと思います。

以上を踏まえて、会員には「意見表明」を別刷りで同封します。なお、この秋（11月予定）、戦後70年目のテレビ放送から問題作を選び、白熱のシンポジウムを行います。

シンポジウム「戦後70年、放送は何を伝えたか」

戦後70年目の今年は、「安全保障法案」の国会審議と「70年首相談話」の発表が重なり、関連する多くの番組が放送されました。前者は、日米安保体制に関する番組として、後者は歴史認識に関わる番組として、それぞれ今ま

でない切り口のものに注目すべきものがありました。戦後日本の国際社会、ことにアジアへの復帰をテーマとしたものから、「安倍首相談話」に対するアジアからの批判を意識した番組まで、総て戦後レジームに関わるものが目立ちました。

戦後70年目の日本社会が戦後の終わり」に在るか、「戦前の始まり」に在るかという問題意識の表れかもしれません。しかし、相変わらず「戦争の悲惨を描けば戦争に反対したことになる」という楽観的な番組も数多くありました。

戦後70年は、戦争に関わる放送にとつても大きな分岐点です。

「放送人の会」は、以上のような視点から番組を選び出し、放送の可能性限界などについて活発な議論をしたいと思えます。

第15回 日韓中テレビ制作者フォーラム「韓国プサン大会」参加最終案内

会報や理事会報告等ですでに案内済みの表記フォーラムに、重ねて参加の案内をいたします。会員からの参加申し込みは9月7日現在15人、その他の参加者も含め、計25人がエントリーされています。今大会の各国参加者は40名まで、となっていますので、まだまだ余裕があります。そこで、参加締め切りを、9月末として、改めて参加者を募ります。

今回、日本の参加希望者が少ないのは、このところの日韓関係の冷え込みに起因しているものと見られますが、先日の中韓首脳による呼びかけで、この期間中あるいは直後に、日韓中の3国首脳会談が韓国で開かれる予定です。フォーラムに参加することで、3国のダイナミックな関係の変化を、この目で、しかと見られるかもしれません。こうした流れを実感しながら放送人同士の友好理解促進を図りたいものです。

会期は、10月28日から31日（全日参加でなくとも結構です）

場所は、韓国プサン市

内容、スケジュール、航空便案内は、理事会報告と同時に同送した案内を参照ください。

あらためて詳しくお知りになりたい方は、事務局までお尋ねください。

日韓中テレビ制作者フォーラム実行委員

渡辺紘史

消夏座談会

2015年夏の放

送を語る

恒例の座談会である。例年は1年の前半の放送についてドラマ、ドキュメンタリーなどジャンル別に論じ、その中で終戦特番が多く語られたのだが、今年は戦後70年終戦特番が数多く、充実しており、これだけを集めることに集中した。安保法制の審議が進むおり、戦争と放送について語るこゝとが最重要だと出席者一同が考えたからである。

発言者を示すA、B、C、Dはまとめのための段落記号に過ぎず、特定の個人を示すものではない。また、言うまでもないが、ここに述べられた意見は出席者の個人的な意見で、放送人の会の総意ではない。記事の責任はまとめた編集部にある。

A 今年は昭和19年以降、サイパン陥落以降の日本が壊滅して行くあたりが中心で、「終戦」ではなく「敗戦」の観点に徹しているのが特徴だったと思う。

B 戦争をやったのは戦場であれ銃後であれ、勤労動員であれ疎開であれ、その主役はほとんど若者だ。今証言でよくみる90歳台の人たちは戦時は20歳台だった。われわれもつい錯覚するのだが、戦争は実は若者がやっていて、やらされていたということ

は今の視聴者に通じているのだろうか。「見ている若い人、あなたが戦争では主役なのだよ」ということが伝わったかどうか危惧する。それが今後の課題だろう。

C 終戦秘話が極めて多かった。天皇のご聖断、鈴木貫太郎、阿南陸相がかなり出てきた。「戦争をやめたのは大人たちの知恵だ」という番組がある。それで若者の戦争というところが薄められたかもしれない。

D 「終戦」という言葉には「台風が去ったいいお天気になってあよかった」という感じで戦争を受け止めている感じがある。戦争末期、私のうちには海軍省や海軍経理学校など海軍関係のひとがよく来て、近所の長屋には海軍文官関係のひとが下宿していたが、7月の終わりがから彼らは「日本は敗れた」とぶつぶつ呟いていた。だから周囲はポツダム宣言以前から日本は敗けたと思っていた。

A 私は小学生で愛国少年だったから、8月15日の特別放送の予告を大騒ぎがあったが、国民を鼓舞激励する放送かと思っただけで聞いていた。世代、地域でいろいろだろう。

B 若い人も市民も戦争によって被害にあったということが延々と語られるのだが、加害者であったということは例外的なものを除けばまずなかった。そこは「やつぱり今年もそうだったか」という印象だ。

C 女と戦争という観点のものもあった。「二番車走った」(NHK総合 8月10日放送、演出 岸義幸、出演 黒島結菜

阿部寛ほか)はかつて広島テレビ時代の堀川恵子さんがドキュメンタリーでやった題材で、原爆が落ちて3日後に市電が走ったという実話をもとにしたドラマ。あそこでは女学生が電車を運転するが、日劇や両国国技館などドームの中では落下傘を作るため勤労動員の女学生が働いていた。過酷な労働も含めさまざまな形で女学生は働くのだが、それが戦後女性の職業意識を作ったともいえる。

D 広島に限らず電車を女学生が運転する例は多い。

A 東京では運転はないが車掌は女性だった。

B 女性のものでは従軍看護婦のものが二つある。一つはドラマ「レッドクロス」女たちの赤紙」(TBS 8月1日放送、木脚本 橋本裕志、演出 福沢克雄、出演 松島菜々子、西島秀俊、もう一つはNスベ「女たちの太平洋戦争」日赤報告書が語る戦場の現実」(NHK総合 8月13日放送。男たちの苦烈な戦闘の裏での地味で大変な苦勞を描いている。

C 「レッドクロス」では、日本人に殺された中国人の息子を日本人の看護婦が育て、その子は中国で医師になるという、あまり描かれない加害者と被害者の問題が描かれている。

D いや主役に向けられた制作者の情熱は脇役や小さな役には向けられず、中国人役への配慮も不完全燃焼だと思う。例えば土地を奪われた満州人の役をエキストラにや

らせている。これはドラマの限界かもしれないが主役をみていると周囲がみえなくなり、ご都合主義の薄っぺらなヒーローマンドラマにみえてくる。

A いや、最後の中共軍の描きかたを別にすれば、いやなエクスキューズ、誇張や美化のない優れた戦争ものだと思う。

B 「女たちの太平洋戦争」は前の「女たちのシベリア抑留」でもあったが、80、90の女性たちが実に鮮明に事実を覚えていて、傍観ではないのだが戦争をしている男たちを冷静に見守っている発言は非常に面白かった。秀作です。

C 70年ということで日本はこれからどうするかという観点の番組もあった。Nスベ「戦後70年ニッポンの肖像」戦後70年を超えて日本人は何ができるか」(NHK総合 8月15日放送)は決して十分なものではないがルポルタージュとスタジオを使っている番組。逆に「戦後70年と『失敗の本質』」(BSフジ 8月1日、2日、2夜連続放送)は日本軍は何故負けたかを分析し経営戦略のテキストにも使われる鈴木博毅著「失敗の本質」を映像化し、座談会で扱ったもの。これからどうするかを8月の番組でやった例はこれまであまりない。

D 「戦争をやっちゃいけない」とは誰もが、80、90の高齢者も、安倍晋三も言う。今のディレクターたちは戦後70年経つたいま、高齢者にただ過去を語らせるだけでなく、歴史的な経緯をふまえて現在をどう感じているかを語らせるべきだろう。政治的

なメッセージや生のイデオロギー的なものでなく、戦争を体験した人が日々の暮らしの中で今の空気をどう感じているかを引出さなくてはならない。大島渚が1963年に作ったドキュメンタリー「忘れられた皇軍」の最後のコメントは街を通る人々を映しながら「これでいいのか」と問うている。その問いはいまも生きているが、そうした問いが今のドキュメンタリーに欠落していることが気になる。

A 私はどうしても総理の70年談話と引き比べながら見ていた。安倍談話で欠落しているのはアジアの視点で、談話では一応言っているのだが前半は大東亜戦争肯定論の論理そのまま、後半はボツダム宣言受諾体制そのもので、完全に矛盾している二つをねじっているの、その間で欠落するのがアジアだ。アジアの視点で番組をみているといくつかはある。沖縄に関するものは多くはないがいくつかあって、「平植民地」の状態の沖縄をみているもの、子どもの兵隊などがあつた。今の沖縄、沖縄での戦争、半植民地の沖縄、そして植民地としての朝鮮半島とつなげてみているとまだまだ引き出せるいろんな問題があるとの感触を持った。

B ETV特集「書き換えられた沖縄戦」(NHKEテレ 8月16日放送)は、東京大空襲と同様沖縄戦での住民は戦争の被害は国民等しく受忍の義務があり保障の対象にならないという問題を扱っている。

東京大空襲では「正しい戦争だったから」

と保障しないのだが、沖縄へ行くとそれが逆転し「壊の提供」で日本軍に協力したから、正しい戦争に協力したからと保障の対象になる。ここには具体的な問題系の感触がある。

C 沖縄の放送局の頑張りもあるが、フクシマとの連動でこの1、2年沖縄をみつめる目線は多少変わっていると思う。英雄たちの選択(命令は「生きろ」)(NHKBS P 8月13日放送)はその一つだ。昭和20

年1月に沖縄県知事を命じられた島田勲(あきら)の話で、彼がいかに沖縄のため頑張るかを描く。島田は半年頑張つて死ぬのだが番組の最後の結びで3人の人が「昔は官僚でもこのように教養が身についた人がいたのだ」とそれぞれに言う。「安倍には教養がない」と聞こえてしまうがなかった。それを含めこの1、2年沖縄は番組の作り方が変わつてきたと思う。

D 沖縄についてはゴリがやつた「戦場の真心チムグクル」(NHKBS1 8月10日放送)。ゴリの台詞に「私は日本人でもアメリカ人でもない。私はウチナンチュウだ」というのがある。一方、沖縄本島の周辺の島ではウチナンチュウに差別されていた。

A 差別は差別を生むのだ。石垣島、波照間と差別の入れ子構造になつていた。

B それからBS1スペシャルの「戦火のまエストロ近衛秀麿ユダヤ人演家たちの命を救った男」(NHKBS1 8月8日放送)、「武士の娘」(NHKBS1 8月11日放送)の3本は異色だが興味をもつて

みた。「武士の娘」は長岡藩家老の娘で明治35年渡米した杉本鉦子と彼女を支えたフーレンスの話。フーレンスは徹底したピュリタン、鉦子は武士の娘らしい気品のある凛とした女性。鉦子のような高潔さは近代化の中で疎まれたり至められるのだが、フーレンスは戦時下の日本へやってくる。この二人の関係をみると、忘れられた、あるいは気がつかなかった日米関係はこうではないかと思ひ、本来の日米関係は終戦ではなく明治維新まで遡るのだと思ひ、アメリカのバイオニア精神を支えたピュリタニズム(清教徒)は受け入れる機会があつたではないかと思つた。

B 先ほど官僚の話が出たが、官僚組織は戦後の改革のなかで手をつけられていない。軍隊も官僚組織みたいなものだったし、岸信介は満州国の大官僚だった。官僚の問題は戦後70年を斬る上で重要な日本人論組織論の対象なのだ。

C 終戦直後から9月ごろまで大手町から霞が関を通ると各官庁から書類を燃やす煙があがつていた。官庁は2週間も3週間もかけて書類を燃やし続けたのだ。そうやって官僚は証拠を消し、戦争責任を免れた。これは大事な事実だと思うが取り上げた番組はない。

D 内務省は正式に書類を焼けと文書で指令を出している。これは最近新聞記事になった。

A 下重暁子さんは職業軍人だった自分の父親が戦後書類を持ち帰って終日自宅の庭

で焼いていたと、今年ラジオで語っていた。

B 官僚の保身について日本は世界でもまれにみる強い伝統を持っている。終戦は物凄くショックだったはずだが難なく官僚は生き延びた。戦後官僚は「全部軍が悪い」と軍に責任を押し付け、自分たちは責任を逃れた。書類を焼くというのは欧米ではあり得ないことだ。書類を焼けば後継者に何も伝わらない。何も伝わっていないから検証ができない、戦争の加害者責任問題をちつともやらないのもそのせいだ。

C やるにも資料がないから、日本のことをやるのに資料や映像はアメリカの公文書館に頼る。今年はオーストラリアの公文書館の資料も利用していた。

D TBS報道特集「BC級戦犯」とか「呼ばれた男」(8月1日放送)はNHKの番組でも扱ったことのある李鶴米さんの話だが、この人の資料は全部オーストラリア公文書館に残っている。その資料に「liard」とか「と」書いてある。つまり嫌われ恐れられたのだ。彼は朝鮮半島から連れてこられてタイの奥地で捕虜収容所の監視に当たり、BC級戦犯として死刑または無期懲役の刑を受けた。この人の場合は被害者であり加害者だ。同じ戦犯として処刑された人はいらるが李鶴米さんは生き延びて現在96歳。この人は個人としてオーストラリアへ行きかつての捕虜に謝罪した。オーストラリアでは最初受け入れられ歓迎されたが、話をしているうちに「私は日本の植民地に生まれ、日本の天皇の軍隊の末端

に入れられ、自分の意志ではどうにもならなかったのだ」と言った途端物凄いブーイングが起った。「やったのはあなただろ」と許してもらえず、重い荷物を背負って帰ることになった。被害者であつて加害者になつて、もう一度被害者になつて、しかも全く保障の対象にならない。戦後のBC級戦犯なので日韓条約による戦時中の保障の対象にもならない。日本の国籍はない。

A TBS報道特集「戦争を忘れた東京の70年 ドイツと中国で考える被害と加害」

(8月15日放送)は戦略爆撃のことをやっていたが、東京大空襲については名簿があるのだから出さない。人数もはつきりしない。それでドレスデンへ行くのだが、ドレスデンには物凄い記録がある。ネオナチはその空襲を「ホロコースト」と言い、ナチスの犯罪と相殺しようとする。日本ではそんな行動には反発があつても行動には出ないが、ドレスデンの被害者は「我々は被害者だが加害の責任もあるのだ」とドレスデンの市内にネオナチの人が入らないように人間の鎖を作る。番組はそれからドイツはポーランドを爆撃し、日本は重慶を爆撃したと続く。アメリカのトリニティーへ行くとアメリカは原爆は仕方なかったのだと言ひ、原子力平和利用を言ひ出す。空襲の場合被害者は一般市民で、東京大空襲の被害者も「われわれは被害者だ」と意識しないのだが、ドレスデンや重慶の被害者となつて自分で自分たちも戦争に加担したのだと自覚しはじめる。金平キヤス

ターは番組の最後で70年談話に触れていた。東京、ドレスデン、重慶と追ってくる。70年談話の空疎さが目立ってくる。頑張った番組だった。

B 一般市民の戦争参加ということでは沖縄の市民は「壕を提供した」という形で戦争に協力したことにされた。これは保障を得るための官僚の善意の作文だが、「文書にこう書けば保障が出るよ」と教えられて沖縄のひとは凄く屈辱を味わいながら書いて戦後を生きてきた。教えた援護局の人は善意であつたろう。しかしそれは集団自決、壕を追い出された事実、スパイ容疑で殺されたなどの記録を沖縄の人目らの手で書き換えさせたことだ。

C 保障のための手続きは20の項目のどこかに該当すれば保障の対象になるが、どの項目にあてはめられるかと知恵を出した役人は日本軍に協力したとすれば対象になる、そうでなくて日本軍あるいは米軍に殺された人は対象にならないとした。いまの沖縄でも政府の方針に賛成すればお金をばらまぐのと同じだ。

D 非常に乱暴なことを言うが、従軍慰安婦に「戦争に協力して性の提供をした」と認めれば保障すると言ひ、従軍慰安婦はそれに応じるのか。彼女たちは間違つた戦争によつて被害を受けたのだから謝罪して保障しろと要求している。沖縄の場合は壕を追い出して殺したことを「壕を提供して軍に協力した」と書き換えた。しかし従軍慰安婦は「正しい戦争に協力した」とは口

が裂けても言わないだろう。そして保障はされない。そんなよじれた問題があちこちにある。加害、被害の問題も含め包括的に見て行くと安倍談話を相対化させてしまうような番組はいくつかあつたと思う。

A TBS「戦後70年 千の証言」で久米宏がたえず若者を意識してマイクで喋つていたのがよかった。

B 今年には戦争末期の苛烈な状況、敗戦に力点が置かれたが、戦後意識はどうか。文芸評論家の磯田光一は「戦時中と戦後は変わつていない。いまこそ戦時中なのだ」と文明批評的に言つた。経済企画庁が「もはや戦後ではない」と発表したのは1956年だが、戦時中と戦後は地続きだったという感覚は続いていた。60年代の高度成長、大量生産は勤労動員と同じ、大量販売で団地などでビブブームが起つたときの販売員たちは戦時中の20人規模の小隊と同じ。日本人は小隊規模だと規律正しく強いのだ。そうした15年戦争のときから築き上げられた軍隊の末端組織がそのまま生活哲学、行動原理となり戦後も続いていて高度成長、大量生産、大量消費につながつたのだ。磯田光一流に言ひばそこに流れているものは戦時中と変わつていない。現在のヘイトスピーチの行動は戦時中「非国民」と叫んでいた連中と同じだ。終戦直後新しい民主主義の時代にもっと生々しい発言の方法を見つけられるはずだったのにいまだにない。そのためのことを来年も再来年も夏のジャーナリズムは引き受けるべきだと思

う。

C シールズ (Students Emergency Action for Liberal Democracy) が出てきたのは今年の特徴だ。あれは現在の大学の自由と民主主義に対する若い人の危機意識がネットを通じて広がつたものだ。最近やつとマスメディアも取り上げるようになった。8月30日には物凄いことをやる計画だ。

D 60年安保以上の動員力と言つているが…

A その比較はまだわからないが、60年は総評、全学連ほかあらゆる組織が参加した。今回は組織らしい組織はない。リードしてきた人も学者や研究者が多く、野党以外の政治家は参加していない。シールズは国会周辺で過激な行動は抑制し集会が終わると積極的に解散を促している。マスコミの扱ひもまた距離がある。

B テレビは断片的にしか扱わない。取材は及び腰、トライアルな報道姿勢がないのが目立つ。

C 安倍談話は「あの戦争にはなんら関わりのない私たちの子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに謝罪を続ける宿命を負わせてはなりません」というのは自分自身へ向けて言つているのだと思う。この「子や孫」にあたるのがシールズの連中だが、彼らは「背負わなくてはいけない荷物をおろしてあげますよ」というお為めかしを見抜いて、それに対して「違つ」と言つている。シールズもヘイトスピーチも追つ

で行けばきちんととらえられるはずだが、なんか及び腰だ。視点がないのだろうか。

NHKの9時のニュースを見ると「え？これで終わるの？」と思うことがしばしばだ。

D 終戦特集番組には純文学と大衆小説のような差があるが、それぞれの放送局が工夫して、新しい発見はないけれども、あの戦争を若い世代にどう伝えるかと工夫する点で新しいものはいくつかあった。「**私たちに戦争を教えてください**」(フジ 8月15日放送 出演 小栗旬 松坂桃李 福士蒼汰 有村架純 広瀬すず ほかもそのひとつだ。今年特攻がかなり多く扱われ、この番組でも福士が特攻の生き残り千玄室さんに取材し、自分の祖父が特攻の候補だったというエピソードが紹介された。それぞれの若手人気タレントが戦争と当時の若者についてさまざまな形で取材し、語っている。

A フジのは代表的なアイドルタレントを集め、一種の局内クイダーみたいなお話をやった番組だ。若い人が感じている危機感を具体的な形のあるものにし、制作者の工夫があつて面白い。他の局も若いタレントをけっこう使っている。これは今年の目立った傾向だ。

B 「**桜井翔&池上彰:教科書で学べない戦争**」(日本テレビ 8月4日放送) もそんな工夫のあつた番組だ。現在小学校、中学校で使われている教科書を手掛かりに戦争をひも解いて行く。感心したのは「**アニメ団地ともお**」のスペシャル版(NHK 8月14

日放送) あの団地は年寄りから若者までいろんな人が集団として生きている。とつばい女子高生が成績が悪くて先生が戦争について補習授業を始める。するとその教室に団地中の人間が次第に集まり戦争について学び議論する。ともおはともおでガキ同士の縄張り争いをしている。毎週土曜放送のレギュラー番組の中で戦争をとりあげることと戦争を次の世代へ伝える工夫をしていた。

C 同じことをやるのに別の視点からとなると前は外国へ行つて新しい資料を探したりしたが、今は若い人を意識して光をあてる。「**団地ともお**」は子どもの目から見ている。あの番組で面白かったのは「8月15日はいいい日なのか、悪い日なのか」という議論。戦争が終わったからいい日なのか、敗けたから悪い日なのか、とわけがわからなくなつておじいさんが怒り出す。クエスチョンは単純だが本質をついている。この議論は一般にはまだきちんとされていなが、それを子どもとおじいさんがやるのだから面白いし、説得力がある。

D ふだんのアニメ番組のなかでの企画をどんな人が考えたのだろう。

A 監修は「あさいち」の柳沢秀夫解説委員だ。他の回に監修はなくてあの回だけ監修がある。

B アニメではNSペ「**あの日・僕らは戦場で少年兵の告白**」(NHK総合 8月11日放送)。あれは沖縄で作ったのだが、あれをどうみるか。アニメでなければ再現

できないこともあつて、証言者とアニメという組み合わせだ。目の前で幼馴染が軍医によつて殺されるのを見たことを元少年兵が弟に話す場面、あれは絶対にアニメにできない。元少年兵は撃たれたというのをなかなか言わない。それをずっと撮っている。弟が「どういうことですか？」と聞く。「うん」。あれは実写でないと無理だろう。

C あの番組はドラマにせずアニメドキュメントにしてよかったと思う。ドラマにすると、語られている事実の重さリアリティを、作る側、演ずる側がもう一度なぞることで見るとは忘れてしまう。アニメには象徴性がある。見る側はそれに思いを仮託することが出来る。ぎりぎりのところで成功した企画だと思う。

D あのアニメがいい感じなのは予算が少なかったため紙芝居的だからだ。お金をかければいまはかなり実写に近いアニメを作ることが出来る。沖縄で作ったからあんなにシンプルにできた。

A モザンビークなどアフリカの少年兵のドキュメンタリーが前にあつた。洗脳され、薬をうたれ、何が何だかわからなくなつて帰つてきてトラウマでフラッシュバックに襲われ、最後に自殺する。今回の少年兵はあれに重なる。アニメのおかげで連想できたのかと思う。世界中に洗脳された子どもがいるのだ。

B 広島や長崎の放送局はこれまでと違つた形で原爆をみるかと工夫している。BS 1スペシャル「**Eロンマ:世界を変えたあの**

日」(NHKBS1 8月7日放送) は英国の制作会社ブルックラッピンが作ったもので、原爆はどう開発され、投下され、そのことを広島、長崎をどんな目で見ているかという総集編だ。総集編だがイギリス人の眼でみているので新しい視点もある。原爆を落とすことがどんな意味があるかをイギリス人の目、アメリカ人の目、そして日本人の目、ユニークなことに日本人の目は日本の目と広島を目にわけてあるというさまざまな目で見ている。

これまでのような工夫がなされてきたのだが、今年は70年の節目で、さあ次世代へどう伝えるのかと一層の工夫がなされたと思う。評価したい。

C NSペ「**きのこ雲の下で何が起きていたか**」(NHK総合 8月6日放送) は原爆投下直後に撮影された御幸橋の写真をCG化した。

D カラー化してCG化した。死んだ赤ちゃんと抱えて「起きて、起きて」と揺する。元の写真の凄惨な衝撃度が非常に機械的なものに置き換えられた感じだ。いい番組なのにあのCG化には違和感を感じた。

A 新しい事実がない中で、若い人向けにあるいはディテールにこだわつてより詳しく見せよう、ダイジェストにする、などが今年の特長だが、その中の一つが新しいデジタル技術を使っている。「きのこ雲の下で」とNSペ「**カラーで見る太平洋戦争**」(NHK総合 8月15日放送) がそうだ。ふたつとも総集編的な内容だがともに功罪

半ばすると思う。「カラーで見る」では学徒出陣のリニクにお守りかお人形が見えていたり、出陣するゼロ戦の機体の物凄い傷み方や、出陣する特攻兵の顔がこわいようなこわばった表情かと思っていたらカラーでみると明るく悟りきった表情がミエミエでリアルによくわかるものが多かった。「カラーでみる」はその意味で評価できる番組だ。あの技術で解析はどんどん進むだろう。カラー化された今の段階の映像が一つの標本のように固定化されるのは危険だ。画が語り過ぎると想像するものを失わせる。

B 白黒写真とカラー写真を比べると白黒の方がいい、芸術的だと言われることがある。情報量はカラーの方が圧倒的に多いのだがどうなのだろう。

C あの赤ん坊を抱えている写真は有名な写真で、皆あれからいろんなものを受け取ってきた。しかしCGは想像力を失わせる。

D あの番組で注目したのは、原爆での死因で最も多いのは火傷だということ、13歳の少年少女の死者が一番多かったということだ。これまで意識しなかったが成程と思った。

A 8月6日のTBSニュース23「千の証言」では福山工業専門学校が同じ写真のCG化をやっていた。そこにはモデルになったおばちゃんが出て、布団を折って抱きしめる。その動きを見て生徒たちがCGを作る。NHKの番組とどうつながっているか説明がないからわからないが…

B 源氏物語には谷崎潤一郎や瀬戸内寂聴などいろんな現代語訳の源氏があつて、それぞれ意味があるように、カラー化、CG化もいろいろあつていいのではないか。カラー化の作業を見学したことがあるが、戦前、戦中のものは当時の婦人雑誌などを参考に、NHK川口技研では着物の柄から色を判断して着色するというこまかい仕事の成果だ。カラー化するとそれまで見えなかったいろいろな情報が浮かび上がってくる。学徒出陣のカラー化を見て忘れていた戦争中の匂いを思い出した。カラー化の仕事は凄いなと思う。アメリカ軍がイーストマンコダックで撮った戦場写真よりはるかにリアリティーがある。

C 問題はカラー化ではなくCG化なのだが、元になる写真は2枚なのに長すぎた。しつこかった。短ければ気にならなかっただろう。最後にカラーになって皆子どもだとわかった。カラーだからわかった。それと皮膚が真っ赤になっているのもわかった。制作者は最後の画を出したくて御幸橋の橋の上をやったのだと思った。

D 解像度を増し、角度を変えてみたら子どもたちが写っていた。つまり1枚の写真から見えるものを全部見ようとしているわけで、その中で女の子を抱いて揺るCGだけが違和感があつた。

A あれはお母さんではなく、年上の姉さんか誰かだ。その説明がないのでみるひとは誰もが母親だと思った。

B もう一度トラックが来たのでおんなの

子が行くと「元気な兵隊になれる者だけだ」と乗ることを拒否されたエピソードが語られた。あれはなかなか鋭い話だ。

C ネットでは、爆撃による死体がカラー化で血の色がみえると「果敢の仕業だ」「沖縄よりひどい」という反応が出てくる。

D 死体の黒く焦げた映像はカラー化する事で確かにむい。

A ネットの反応で気になったのは「空襲がなければ日本も戦争嫌いの国にならなかったのだ」という書き込み。こんな映像を見ないで戦争に行きたいということか、「鬼畜米英」と言う言葉を久しぶりにみた。

B カラー化でリアリティーの質が変わっている。

C マレー半島進攻の映像で、行進する日本軍の戦車兵の首に真っ白な布があり、ナレーションが「戦友の遺骨を包んだ白い布はカラー化によってわかりました」と言っていた。白い布は白黒映像でもわかるのではないか？

D いやいや、カラーの中の白とモノクロの中の白は全然違うのだ。更にあれは映像を鮮明にする技術も使われている。

A 津波の映像にはいまもフラッシュバックするひとがいるので70年前のカラー化映像にはどんな反応があるかと気になっていたので…

B 津波の映像には家族の遺体が写っている。プライバシーの問題があり使えない。70年たつと「あの死体はおじいちゃんだ」と言う人が稀にいるかもしれないが、常識的

には死体は戦場の兵士の死体、空襲の被害者の死体と一般化しており、特定の個人のものではない。

C 慣れもある。「遺体の映像が出ます」とテロップが必ず出ていたが、あれは津波のとき以来だ。

D ベリリュー島の兵隊の死体の映像から解禁された。沖縄の死体の写真も今年かなり見た。

A ベリリュー島で衝撃だったのは死体より気がおかしくなつて「ふらふら、ふらふら」と動く映像。あれは初めてみた。

B 欧米の新聞には「日本が死体の映像を出さないのはおかしい。あれで日本人の受け止め方が歪められている」との意見が多い。欧米ではイタリアのモロ首相はじめほとんど出す。

C カラー化で言えばこの前に「カラーで見る東京不死鳥都市の100年」(NHK総合 1月1日放送)がある。カラフルな銀座のネオンが消えたとか、あれは衝撃だった。

D 風俗をみると戦争を見るのとは違つから。

A 焼死体はわれわれの想像では黒焦げだがカラーでは赤焦げなのだ。衝撃だった、あれは歴史そのものの認識を変えて行くと思う。

B 前のカラー化のときはそれぞれオリジナルな写真があり、それはカメラマンが自分の目で撮ったものでこれまで見た人はそれぞれに印象がある。それがカラー化した

ものだけが保存されたらおかしいものだ。

C 東京空襲の映像は地上のものがなくてよかった。前に放送された番組では地上の映像は東京ではないおかしな映像が紛れ込んでいた。上空からは米軍が撮ったコダックのカラード。

D Nスペ「戦争とプロパガンダ」アメリカの映像戦略」NHK総合 8月7日放送」をみると日本と欧米人の映像に対する考え方の違いがわかる。日本のプロパガンダは戦場のリアリティーのある映像を使うのではなくポスターや標語などでの洗脳のためのものだ。あちらは戦場のリアルな映像を使い編集し、戦時国債を買ってもらう目的のためにやっている。日本もアメリカも同じようにひどいことをやった。

A きちんと残すべきものと消していいものと両方がある。宣伝目的でわざとむごたらしい面を撮り、戦闘中にも拘わらずかっこいいところを撮るため撮り直しをしたりする。サイパン島のバンザイ・クリフでは身投げする女性とその後海に浮かんでいる赤ちゃんの二つの死体をみせている。

B 赤ちゃんが海に浮いている映像はショックだった。

C あれで日本人はとんでもないことをする。狂人ジャップと戦意のあがらない国民を鼓舞した。

D それが映画になってアカデミー賞をとった。

A 硫黄島のやらせは有名だが、ベトコンがアメリカ大使館に潜入したやつもやらせ

だ。

B サイパンの映像は前に見たときはカメラマンがああ女性に近づき、女性はカメラ二向かって振り向きクロースアップされる。女性にはカメラが機関銃に見えたのだから。自暴自棄になって投身した。編集で違ったものになっている。

C 「戦場のチムグル」では比嘉太郎は12回壕に入り投降の説得に1回だけ成功しなかった。沖縄は激戦地で日米は悲惨な戦いを徹底的に戦ったのだとされるが、そうでない場面もあった。比嘉太郎は分厚い本を残しているが番組はこれを忠実に再現した。厳しい戦場でも無抵抗の人間は殺さない。主人公の教養、思慮の深さがベースになっている。好感をもて見た。

D 沖縄県知事島田叙もそうだ。沖縄人を救った理性、良心。権力に抗する理性。武士の娘もニューリタン精神と武家の精神が国家の間で揺り動かされ、何回も日米を行き来し、しかし二人の間でのスピリチュアルなものは揺るがなかった。

A 島田知事は壕の中で時間があると本をよんでいて、それをみていた島民の女性が「大した人だ。立派な人だ」と言う。

B Nスペ「終戦 知られざる7日間」戦後 はこうして始まった(NHK総合 8月16日放送 ナビゲーター 二宮和也)にもそんな人物が出てくる。終戦になって武装解除に応ぜず、徹底抗戦、戦起を主張する上官に対して戦起を拒否し、戦後の日本復興に尽くしましょう」と説得した渡

辺中尉。彼は学徒出陣らしい。彼が狂気や混乱をおさへ、部隊は日本へ帰ってきた。

C 渡辺中尉は中曽根康弘と同期だそうだが、Nスペ「密室の戦争」発掘日本人捕虜の肉声」(NHK総合 8月2日放送)の稲垣利一主計大尉も中曽根と同期だ。中曽根は内務省から海軍に転じて呉鎮守府で主計官。終戦時は少佐だ。青年将校と呼ばれたが文字通り。戦後政治家の中では右派だとされるが「侵略だ」とはつきり認めているし、靖国の合祀については天皇が行けるよう分離すべきだと言いい、戦争を知らない安倍のグループとは違いがある。

D 中曽根は安倍談話の出るちよつと前に読売新聞に寄稿したが、あれは「お詫びの言葉が入る人らないでこれ以上突っ張っているといろんなことに波及する。安保法制を通すためにはこうしなきゃ安倍さんダメだよ」とのメッセージだ。

A 中曽根はボルネオ島のバリックパパンという慰安所を作っていて、そのことはTBSの「報道特集」で伝えられていた。今回の読売の寄稿は風見鶏の風を読む能力をフルに発揮したものだ。

B 「密室の戦争」は迷いながらみた。大岡昌平の「レイテ戦記」に関連して捕虜尋問調査をみたことがあるが、たくさんあって、写真があり、文面があり、自分の故郷の地図もついている。釜石出身者のものには港の配置図まである。「自殺したい」「ハワイへ行きたい」など、全部喋ってしまった敵に協力したからもう日本へは帰れない

と自殺願望が強いのだが、その中で稲垣の最後は何だろう？

C やはりあそこで自分にオトシマエをつけたのだ。しかし戦後70年、制作者はよくあそこまで訪ねて行くなあ。あの番組は、軍隊の組織、カルチャーの違いがみえて面白かった。

D 同じ体験をした兵隊が片やもう帰れないと思ひこむのに、彼がもう一度戦争反対と言うのは何なのか。それが教養というものが私には自信がない。

A あそこに出てくる少佐はアメリカ情報機関のトップで、インテリらしい奥さんは会ってくれなかった。稲垣利一は1年後に帰国するがこの期間については固く秘匿して長く語らなかった。戦後翻訳の仕事をしたのだそう。

B 「いしぶみ」わすれない。あなたたちのことを(日本テレビ 8月1日放送)では「ああ戦後70年経ったのだ」と思った。作品そのものでなく、あの中に「海行かば」が3回ほど出てくるが綾瀬はるかやウミユカバのアクセントで読んだ。是枝さん初め「海行かば」に親しんだスタッフがたくさんいるはずなのにチェックが入らない。戦後70年だなあと思った。番組はなかなかよかった。

A これまで天皇をあまり意識しなかったのだが、今年は慰霊の巡業で意識するようになった。天皇の話は「15年戦争」と満州国建設から始まる。本来天皇には決裁権はないのに聖断と言う形で天皇に決裁させ戦

争を終わらせた。「知られざる陸軍の終戦工作 あなたは『弱気の勇気』が持てますか?」(NHK B S P 8月27日放送)の松谷誠大佐の終戦工作に天皇は同調していたのだから、高松宮も同調していた。これと比べ合わせると、現在の天皇のお言葉安倍も政府も無視しているがいずれ問題になるのではないだろうか。

B 昭和天皇は統帥権を含め軍に利用できないパーソナリティーだと思いが、今の天皇と美智子さんは戦後民主主義そのものだ。バーニング夫人、美智子さんの聖心における教育、そして行動をみるとわかる。言うこととやることは一致している。侍従を何人かみてきたが、いまの宮内庁の官僚にはすっかりしたのがあるのだと思う。3・11以降の天皇、皇后の巡幸をみると安倍内閣とは全く違う。

C 皇室に親近感を覚えるというか、そんな時代の揺れの中で皇室の位置も皇室を見る角度も変わってきている。

D いや、違うな。あれは水戸黄門の印籠だ。戦時中は教室へ行くと天皇、皇后のご真影、校庭へ行くと奉安殿。そうやって徹底的に教育された者としては、また利用されるのではないかと心配だ。あんなものはない方がいい。

B 聖断は、暴走族に連れられて行ってガソリン満タンのときは止まれと言っても止まらなかったがガソリンが減ったら止まったという程度の話だ。安倍談話では戦争を止めようとしても止められなかった政治シ

ステムと言っている。しかしそれも一連托生で、それじゃ今の政治システムはどうなのだ。次世代に重荷を背負わせないと言いつつながら実は背負わせるようなことをしている。それを止めるのにまさか天皇と美智子さんをお願いするわけにはいかないだろう。(全員爆笑)

C 今の天皇は皇太子のときからお言葉を言うとき宮内庁からの原稿に必ず手を入れていた。しかし昭和天皇は開戦責任について内閣が言ってくるからどうすることもできなかったと言っている。

D 聖断はあつてはならなかった。天皇に押し付けざるをえなかった責任を鈴木貴太郎は取った。

A 「狂気の戦場ベリリユー」(NHK総合昨年8月13日放送)は日米の戦いはよく描いている。持久戦の段階になって火炎放射器を考えだし、沖縄戦で火炎放射器は使われる。そうした戦史的な部分はよくできているのだが島民が抜けている。あそここの島民は避難させたとさえ聞こえはいいが、実は追い出してあそこを戦場にしたら、島民が行かされたのはパラオの北の荒れた島でかなり餓死した。天皇はあの島に行つて「島民の皆さんに迷惑をかけた」と言った。N S Pの「ベリリユー」には島民が欠けていた。

天皇は皇太子のとき「ひめゆりの塔事件」で火炎びんを投げられ、天皇の旅は沖縄から逆算してベリリユーまで行かざるを得なかった。天皇が兵士だけでなくあらゆる戦

争の被害者に謝罪しているのは、よくやっている、正しいと言おう。加害の問題は非常に言いにくいのだが、天皇はその点をはずしていない。

B ベリリユー島の島民については昨年フジテレビが「命ある限り戦え、そして生き抜くんだ」(昨年7月22日、8月15日放送)で描いていた。ドラマは軍が島民を救つて島民は軍に感謝すると描いており、日本軍は島民を救つて自分たちは米軍と戦い玉砕したという日本軍の美談になっている。ドラマで戦争を描くと軍の美談になり、加害は抜けてしまう。

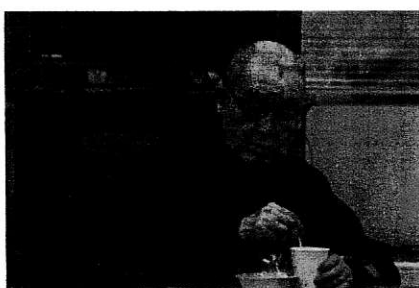
C 島のかつての村長のお母さんに会ったが「この島はもう日本軍と米軍の島です。ベリリユー島の島民の血より日本軍と米軍の血がしみ込んでるのだから、私たちの島ではない」と言った。隣の島は米軍がベトナム戦争のときゲリラ戦の訓練場にしたところで、荒れた島で食べ物にはトカゲくらいしかない。人間を食った話が残っている。島民が魚を獲ろうと海岸に近づくと逃げるのではないかと疑われ射殺されたり、船を真つ二つに切られたりした。島民を救つたなんてとんでもない。

D 想像力を働かせるなら、日本は降伏せず本土決戦で焦土になった日本に天皇制はなくなら、米軍の軍政が敷かれ、北海道はソ連に占領されるといった筒井康隆風なS F的仮説ドラマがあつてもよからう。そんなことを言うのは、NHKのテレビ小説、大河ドラマに不満だからだ。テレビ小説は

「おはん」のような明治、大正、昭和さらには曾孫を入れて平成まで4代の家族を集め戦争に終始した日本の原点としての朝のテレビ小説をなぜぶつ切らなかったのか。「花燃ゆ」にしても、吉田松陰の生き方への疑問がどんどん出ている。戦後70年を意識した企画が当然考えられたはずだ。N



河野尚行氏 隈部紀生氏 藤久ミネ氏4



松尾羊一氏

HKのドラマは戦後70年から逃けたのだ。
A NHKドラマ班に今年戦争ドラマの企画はなく、今年間に合わず来年制作予定だ。唯一あつたのは「一番電車が走った」だがあれははじめドキュメンタリーの企画だった。制作したテレビマンユニオンの岸義幸氏はラジオでドラマを作って評判をとったことがあり、「ドラマ的にできないか」と言われてドラマになってしまった。あれでNHKは今年戦争ドラマをやった気になっている。

B NNNドキュメント「海の記憶：父からの伝言」（日本テレビ）8月17日放送は民間輸送船の話。物凄く多くの輸送船が海の藻屑と消えたことを取り上げていた。水中カメラが素晴らしい。父親の記憶がほとんどない息子が海に沈んだ船へ潜ってゆくのだが、船に泳ぐ熱帯魚が綺麗だった。

C 美しいから逆に戦争がよくわかる映像だった。豪華客船として造られた船が接収されて輸送船になっていい設備、内装が残っていて、お風呂があるのだが、熱帯魚がお風呂に入るように泳いでいる。

D 輸送船については「桜井翔&池上彰」でやっていた。真珠湾攻撃の前にマレー半島進攻は始まり、落下傘部隊がパレンバンに降下して石油基地をおさえた。資源のない日本は石油を確保することが大事で、軍艦より輸送船を守ることが大切なのに日本には商船を守る発想はなかった。敵の船を攻撃して軍艦を沈めた戦果は高く評価され、商船を沈める10倍以上の評価だ。それに對

してアメリカは商船を狙った。「海の記憶」でも多くの商船が沈み、石油だけでなくゼ口戦を積んだ船も沈んでいる。石油のない国が石油を産出する国と戦争をしてこの戦略のバカさ加減に驚く。

A 日本軍で一番ダメだったのが兵站だ。戦争で死んだのの大部分が食糧難だ。

B 「食い物はかっぱらって来い」だ。そんな戦争があるものか。

C インパール作戦は悲惨だった。

D 加害者、被害者のことに戻るが、戦後日本の世論形成の中核となったのはやはり都市の住民で彼らは空襲で大きな被害を受け、「われわれは戦争の被害者だ」と思い込んだ。戦争に行つて加害者だった連中は帰国して多くを語らなかつた。今年、加害についてわりと多くの番組が作られた。来年以降の突破口ができた感だ。

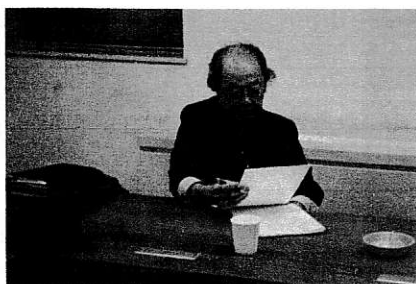
A 日韓中フォーラムで中国、韓国とつきあっているが、韓国を相手にするのは大変だ。私は韓国の高校の歴史教科書を丹念に読んでみたが、本の3分の1は近代、現代でほとんど日本帝国の植民地の歴史だ。韓国の歴史をみると秀吉にやられ清国にやられ常に被害者で加害者であることがない。そして韓国への加害者の代表が日本帝国主義だと小学校のときから徹底して教えている。一方中国はこの戦後70年をみていろいろな加害者だ。ベトナム、チベット、香港、ウイグル地区など、中国は政治的プロパガンダが巧妙だが加害者だ。だから中国とつきあう方法はある。韓国とのつきあいは大

変だ。35年も植民地にしておいて日本人には加害者意識がない。一度韓国の歴史教科書を読んで欲しい。

B 安倍総理は「こらー」と言われて普通なら「こめん」と言つてところを「反省する」と言つて謝罪はしない。まず「こめん」と言うところからしか加害者意識は形成できないと思う。

C 日本とドイツの意識の差が言われるが、ドイツでは広く地下戦が行われたが、日本では沖縄だけだ。ドイツはフランス、ポーランド、ベルギーなど隣国と戦つて負けた。その違いはある。メルケルはその感覚で「日本はこれからずっとわび続ける必要がある。ドイツはそれをやつてきたのだ」と言つたのだが、安倍は「次世代にそんなものは持ち越さない」と言つた。これには驚いた。

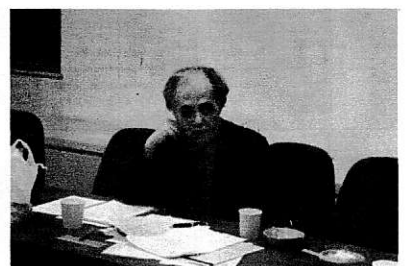
B ハートネットTV（NHKエテレ）は戦後70年シリーズとして戦争と障害者の問題を何本も放送したが、「精神障害者の戦後：病院か地域」（8月11日放送）をみた。終戦間際伊豆大島が要塞化する。大島の精神病院の患者は「ここは兵隊の宿舎にするから」と追い出される。半分は強制的に親もとへ帰されるが20数人が全然お金が出ないまま清里へ行く。清里は標高1300メートル、寒さと食糧難で1年のうちに10人が死ぬ。そして1年経つてまた戻る。この番組は障害者の専門家がずっと作つてきて、専門家の目で戦争と障害者をみつめている。専門家の目だからできた番組として評価したい。



渡邊 史氏



鈴木典之氏



桜井 均氏

C 同じハートネットでも8月25日「20万

人虐殺は何故起きたか」を放送した。ドイ

ツではホロコーストの前に精神病患者を病

院に集めガスで大量に殺した。殺戮には精

神病の医師も協力したが20万人殺したと

ころで突然中止になった。それはホロコー

ストのための人手が必要になったからで

まず国内弱者を殺してからユダヤ人を殺し

たわけだ。日本障害者協議会の代表はドイ

ツを訪ねる。単純な作りの番組だが考えさ

せられる番組だった。

A そのころ結論に入ろう。

B ドキュメンタリーという番組分野への

疑いは出てこないのだろうか。ドキュメン

タリーはいわば純文学だ。一方大衆文学は

貸本屋文化であり映画、歌謡曲につながる。

この文化の2層性の中でドキュメンタリー

は疑いもなく教養豊かな映像としての「純

文学」を作ってきた。それによってもろろ

んい作品が生まれているが、同じ教養層

以外は殆ど無視している。ゴリがやった比

嘉太郎の番組はゴリにドラマの経験がない

せいか、比嘉太郎の息子を連れてきてイメ

ージ作りの入りをしている。面白い作り方

でドキュメンタリー手法の閉鎖性を打ち破

るものではないかと思つた。ドキュメンタ

リーの形がカベになつて視聴率はとれない

D ドキュメンタリーにドラマやフィクシ

ョンを加えるやり方には気になつていた。

比嘉太郎の番組はゴリが沖縄人で息子と一

緒にドキュメンタリーを作つて行く。ドキ

ュメンタリーの幅を広げて、大衆文学性を

加味して成功したと思つた。

A 傷口に塩をすり込まれるようなヒリヒ

リ感は全体にやはり薄くなつていく。ハー

トネットにヒリヒリ感を感じるのはそのせ

いかもしれない。

B ドキュメンタリーに戻るが、カラー化

やCG化は枠を打ち破るものではない。

若い人はちよつと見てツイッターですぐ

反応する。純文学が読まれる保障はなかな

かだろう。大正リベラリズムの教養の活字

型的教養をインテリと呼んだが、いまや

インテリは死語だ。

C 見る側の問題はあつても、アーカイブ

の古い作品は解説なしでは若い人にはわか

らない。解説するとわかる。戦争体験につ

いてはいまや新しい証言者、証言はみつか

らない。戦後80年特集は多分ないだろう。

D いや、継続を信じたい。そんな努力を

しないとイケないね。

A そのころ時間です。このくらいで…

〈座談会開催日時〉

8月28日(金)午後2時〜5時半

〈場所〉千代田放送会館3階会議室

〈出席者〉

河野尚行、隈部紀生、桜井均、鈴木典之、

藤久ミネ、松尾羊一、渡辺紘史

〈書面参加〉堀川とんこう

〈終戦特番リスト作成〉北村充史

〈記録〉伊藤雅浩

羊飼子話

松尾羊一

1939年(昭和14年)。わたしは小学4年生

あの年と安倍内閣の今が酷似している。日支事変

が泥沼化し、厭戦気分を払拭しようと近衛内閣は

国家総動員法を。9月、ヒットラー・ドイツは突

如ポーランドに侵入し、大政翼賛会の下、末端の

行政である隣組は国債を割り当て、組長は防空演

習に出ない(出られない)家庭を訪問して歩く。

山の手が国防婦人会ならわが下町は愛国婦人会

で母親は襷をかけ、出征兵士を送る。それらは表

向きで、女学生の手たちは「愛染かつら」の上原

謙、田中絹代のすれ違いにヤキモキし、わたしら

は双葉山69勝で金星の安芸海を恨んでいた。や

がて魚河岸勤めと印刷屋の多いわが町の銭湯で

は企業整備の話題が持ち切りになる。ポツリポツ

リと廃業の家ができて植字棚やカッターがひ

つそりと何処かへ運ばれ、おやじたちは作業服を

着て軍需工場通いが始まった。一方で「蒋介石を

相手にせず」の近衛文麿は世界から相手にされ

ず、東条英機に託して退陣。議会は大政翼賛会、

機能マヒ。明けて昭和15年、紀元は二千六百年!

翌年には日米開戦だ。緒戦の勝利に酔いしれた民

衆の一人のぼくたちは、鉄砲担いで軍事訓練の

日々。昭和14年から僅か二年余である。かつて

と民主主義の今とは違ふ、そう言えるだろうか。

異議申し立て(シールズ)を見る目がおぞましい

流行語「非国民」の大合唱で覆われる悪夢。起き

上つて「夢でよかった」とかつての軍国少年が思

うこの頃なのである。



いろはに時代劇―その拾五―

菅野高生

「はやぶさ新八御用帳」の役者たちを綴る。敬意を表して、宋戸錠から。役どころは湯島天神の坂下に住む隠居した御用聞きだが、今も現役時代のあだ名で鬼の勘兵衛こと、鬼勘（おにかん）と慕われて厄介ことや相談ことが舞い込む。錠さんを鬼勘に選んだ理由は単純で、好きな役者だったことと、強面で少し滑稽な感じの役柄がよく似合いそうだったからだ。しかも、放送中の93年師走、彼は還暦を迎える。エースのジョーに還暦が来るなどとは考えたくも無かったが、隠居の親分を演じるには良い年回りだと思ったのだ。

一番好きな彼の映画は「殺しの烙印」である。滑稽で悲しい殺し屋は秀逸だった。67年、僕らを興奮させてくれた監督の鈴木清順は、この映画で日活を解雇される。

出演を快諾した宋戸さんに、27歳の若い座長、高嶋政宏を支える「影の座長」をお願いする。影の座長は想像していたよりも面倒見が良く、教えたがりでもあった。収録が終わると、いつもNHK西口近くの小さな鰻屋に高嶋やスタッフを誘う。彼が映画の話を出すと止まらない、54年の日活撮影所ニューフェイス第1期生に合格し、日活アクション映画の「エースのジョー」になるまでの逸話の数々、苦勞話が滅茶苦茶面白い。そして為にもなる。高嶋にとつては一種の帝王学でもあったろうか。

酔うほどに「撮影所のこと、俺は書くからね、資料はあるんだよ、うん」と繰り返す。お愛想で楽しみにしていますと答えながら、飲み会をお開きにするタイミングを僕は計っていた。だが、執筆の話は冗談では無かった。01年の春、事務所から「菅野ちゃん、本が出たよ！」と電話がある。「シンドウ小説・日活撮影所」、一気に読む。「小説」と銘打って、豊富な注釈が付く。その注釈も面白い。50年代の日活、石原裕次郎、小林旭、赤木圭一郎が活躍する中、宋戸錠はデビューしたものの下積み苦闘の日々を送る。果たして自分はスターになれるのか？ 2度の整形手術に賭ける。最後の頁には「つづく」とあった。

続編は12年の晩秋、出版される。「シンドウ小説・日活撮影所」完結編、映画初主演の61年から日活ロマンポルノが始まった71年までの自伝的青春小説である。宋戸さんは日記魔だった。克明に付けていた日記が本の原作になったと言う。人は見かけによらずなもの、僕の中で、エースのジョーが少し几帳面になった。

表の座長を綴る。高嶋とは「はやぶさ新八」が二度目の仕事で、最初は、その5年前の朝ドラだった。会った第一印象は二つ、「やつぱり、デカイなあ」と「ああ、2世俳優だ」である。今でこそ184センチの身長は珍しくないが、当時は少数派だった。さらに、両親から受け継いだスター性が若くして備わっていた。

朝ドラのタイトルは、大阪放送局制作の

「純ちゃんの応援歌」。主演が山口智子だった。高嶋はアメリカで生まれた日系人の設定で、敗戦間もない46年の初夏、和歌山県の山あいの小学校の庭にジープに乗って、颯爽と現れる。詐欺師（細川俊之）に騙され、その片棒を担がせようとしているとも知らずに。詐欺のターゲットは山林地主・興園寺家の未亡人（白川由美）。

ロケ地は和歌山県日高郡美山村（今は日高川町）。脚本は布勢博一。放送は88年10月3日から翌年の4月1日まで。年号で言う昭和から平成にまたがる。

バブル景気に湧いていた時代でもある。深夜11時から営業を始める鰻屋があつて、スタッフと帰りに寄ると、店の前に行列が出来ていた。お使いだろうか、子供が皿を持って並んでいる。大阪の夜は賑わい、子供も夜更かしだと気づいた。

朝ドラに話を戻す。バブルの影響ではないが、演出チーフの佐藤幹夫が山林地主のなりわいを描くため、木の切り出しを画にしたい、山の筏を作ると言い出した。山から集積地まで丸太を敷き、傾斜を利用して、切り出した木を滑らせて流す仕掛けである。興園寺家と想定する、山林地主の寒川（そがわ）さんに相談する。寒川さんは人里婿で、結婚前は商社勤めだった。いったい経費は幾らになるのだろうか、撮影用と言っても、ある程度の長さは必要だ。結局寒川さんは切り出す時期が少し早まるだけだからと言ってくれて、好意に甘えることになった。

問題はその後だった。美山村にはロケが出来る木造の小学校が無かった。ロケハン隊は和歌山県、三重県と探し回り、奈良県の大台ヶ原近くに、絶好の小学校を見つけきた。結果、ロケ初日が「当地とは無縁の地で行くことになる。現地でエキストラは集まるのか、不安になる。」

ロケ直前、気がついた。大台ヶ原は年間降水量五千ミリ、世界有数の降水量を誇っている。一層、不安が増した。

ロケ初日、前日降った雨で、小学校の校庭は水たまりだらけだった。雨が止んだのにロケは出来ないのか、スタッフ総出で手作業のグランド整備が始まる。水溜まりに雑巾を浸して、バケツに雑巾の水を絞る。僕も一緒に校庭の雑巾がけをしていたら、ロケマネが飛んできて怒られた。

「プロデューサーは挨拶です！」。

慌ててヒロイン連れて体育館に行き、ロケ開始を待っている、地元のエキストラの皆さんに頭を下げる。

奈良県でのロケを終え、紀伊半島の尾根道を通って美山村に辿り着くと、立派な筏道が出来ている。寒川家当主のおかげだった。放送から数年後、彼は病没し、奥様が家業を継ぐ。04年、彼女は推されて美山村の森林組合、六百人の組合長になる。撮影した寒川家住宅は13年、国登録の有形文化財になった。

朝ドラ放送の1か月前だった。昭和天皇の病状が悪化し、一瞬、自粛ムードになるが、程なく自粛は消える。しかし、放送内

容の見直し、再点検が始まる。

12月に入り、朝5時に起きてテレビのスイッチを入れ、眠い目を無理矢理こじ開け下ダブリの文字情報を読む。「下血」の病状が変わらないのを確認し、どうやら今日も無事に放送が出来るかと安堵し、再び眠る。

年末年始を挟んで、朝ドラは放送が休みになり、ホン作りも一時休戦になる。大晦日が土曜日で元旦が日曜日、いつもより休みが少ないとスタッフが嘆く。紅白歌合戦

とは例年通り行われ、審査員に選ばれた山口智子の付添で出局する。
正月明けの6日より、ついにカウントダウンとなり、89年1月7日月曜日、昭和最後の日、放送は休止になった。朝ドラ1週間のストーリー展開はすれが、長い寝不足からは解放される。翌週14日に2回分を続けて放送し、通常の朝ドラに戻り、高嶋とヒロインとの結婚が近づく……。

(つづく)

ドキュメンタリー・ワールド講座¹⁵

連続シンポジウム『放送人のメディア生態学』

第1回〈初期テレビドキュメンタリーと「放送人の証言」〉

日時・7月12日(日) 15時~18時30分

会場・東大本郷キャンパス福武ホール

主催・放送人の会、東大大学院情報学環メ

ディアコンテンツ研究機構、NHK放

送文化研究所

司会・西 兼志(成蹊大准教授)

発言者・今野 勉(放送人の会会長)

石田英敬(東大大学院教授)

宮田 章(NHK放送文化研究所

基調報告・

桜井均(立正大教授、放送人の会)

◇

放送人の会の独自アーカイブ『放送人の証言』(現在181名収録済み)にメディア生態学的研究を試みるため、東大大学院情報学環の石田教授が当会及びNHK放送文

「場」として、今後連続シンポジウムを実施することにした。

第1回目は、放送人の会の「ドキュメンタリー・ワールド講座」を主宰し、『証言集』にも詳しい桜井均さんが、試験的な問題提起(証言の読み取り方)で口火を切ることに。会としての「15年度講座」も兼ねることになった。

さて、今回桜井さんは、戦後放送史のスタート期、つまり連合軍占領下GHQの監視と指導下で再開した日本放送協会(NHK)のラジオ放送から70年代のテレビ初期黄金期までのドキュメンタリー分野の証言と作品群の中から、表現上の「画期性」が目立つ事例を選び出し、その特質と意義を分析してみせました。自身のNHK現場経験で得ている豊富な情報・知見と、該当する番組の映像(の一部)を上映しながらの説明には臨場感と説得力があつて、会場の参加者(外部の研究者ら40名)の間に感嘆と一種の高揚感が広がったように見受けられました。

桜井分析の要点を列記すると、

① 街頭録音の時代(証言・NHK・サン・藤倉修一さん)

マイクが街へ出て国民大衆の中心に中継することからドキュメンタリーが始まった。GHQはアメリカ流浸透を狙ってこれを積極的に推し進めた。調査報道、手法の源流となのお時(都心の「夜の女」取材しは有名。お時(こと本名)の更生後日談も感動的。

② ラジオからテレビへ録音ルム構成に転化(証言・NHK・小倉一朗さん)

「日本の素顔」シリーズで各題を扱い、社会的弱者、小さな人の視座を確立。対象に肉迫ビューマイク、現実をぶつきた録音で提示する手法にはメロウ強いイタリア・ネオリアリズム

③ 言葉を撮るII同時録音(証言・NHK・テレクター)

「ある人生」シリーズ吉野同時録音を多用。特集「歳月



婦と健常者の赤ちゃんの意思疎通をマルチ・リンガルな言葉で撮る。手法で感動的に描き、障害者とテレビの関係性にも着目させた。

④ 多声(ポリフォニー)の中の沈黙の意味
(証言・NHK工藤敏樹作日明のカメラマン 葛城哲郎さん)

大河ドキュメンタリー「和賀郡和賀町」1967年・夏を教台のカメラで同時収録、それを多声的に再構成することである重要な言葉の沈黙(サイレンス)の緊張感を表現するなどの衝撃的手法を多用し、日本の現実を重層的に抉る。工藤は「和賀郡和賀町」を「農業番組だ」と称したが、真意は鋭い社会批評。

⑤ リアルドラマと政治の境界線、ドキュメンタリーの創作性の主張(証言・RKB毎日の制作者・秦豊、久野浩平、木村栄文さんたち)

NHKをレッドパージされ民放地方局で反戦ドラマ「ひとりっ子」(久野浩平演出)を制作し騒動となった秦豊、「ドキュメンタリーは創作なり」と作品「芋界浄土」などの事実再現で俳優に演技させた木村栄文ら「自分の意図を徹底的に仮託できる制作手法を貫く」先駆性。

⑥ 意味でなく「現在」を撮るテレビ論とジャーナリズムの関係性(証言・BS村木良彦、田英夫、今野勉さん)
通行人に「あなたは……」の質問を連射し人間存在の「現在」を問う村木良彦のテレビ論「ハノイ・田英夫の証言」で歴史事象

のナマの緊張感を伝える田英夫の報道性。政治権力の介入で生じたTBS闘争を境に「闘争終了と共にテレビ独自の(表現の)可能性の思考がストップしてしまった」と断じる今野勉。テレビとジャーナリズムの関係性の検討はどうか継続されているのか。

⑦ 70年代のテレビは何を映してきたか
II 客観性の欺瞞と表現主義の相克番外編

NHKの龍村仁は「18歳・男子」「海鳴り」「キャロル」で、佐々木昭一郎は「マザ」「さすらい」で、渡辺清は「海峡」でテレビの窓から衝撃的映像を放り込むことを目的化し、殊に龍村は「キャロル」が客観性を欠く問題視され、「客観性」はもともともらしで視聴者を欺く」と捨てゼリフしてNHKを去った。今、表現の客観性はどう挑まれているのか。

桜井分析で、先人たちの創意工夫の系譜の一端が明らかにされました。指摘はテレビの可能性にとつて、なお今日的で、紙幅の都合で、各講師の論評は割愛しますが、次回シンポジウムの討議に興味深く反映されるにちがいないと思います。

会員諸兄姉には、右の要約だけでも、現役時代を省み現今の放送状況に接して感慨を新たにされるのではないのでしょうか。その「共振」こそ「放送人の証言」の価値の「核心」であるように思われます。「関心」の持続と、シンポジウムへの積極的な参加を期待します。(文責・鈴木典之)

ラジオのページ

大学生にラジオの魅力は伝わっているか？ 塚本茂

若者のラジオ離れをいかに克服していくのか。ラジオにとっては、積年の課題と言ってもよいテーマである。果たして、若年世代をラジオに呼びもどすことは不可能なのだろうか。それとも、今の若年世代は、ラジオの面白さを単に知らないだけなのであるのか。筆者は、3年半前から、日本大学芸術学部で「ラジオ史」という講義を担当しており、講義を受講してくれている150名余りの大学1年生、2年生にとつてラジオとはどんな存在なのか。この世代がラジオに興味を抱くことは、もはや無理なのかといった点について、触れてみたいと思ふ。

本題に入る前に、この「ラジオ史」の講義では、どんなテーマを取り上げているのかについて、簡単に紹介しておく。今年からは戦後70年でもあり、同時にラジオ放送開始から90年に当たる。特に、戦後70年というところで、満州事変から第二次世界大戦そして昭和20年8月15日の玉音放送に至る日本の歴史をどう観るのが問われたこととあり、今年の講義では、戦前・戦中のラジオが、どんな内容の放送をしていたのかについて、当時のNHKの音源を使いながら説明した。ナチスドイツの手法を真似

て、「ラジオは声の弾丸である」との厳しい情報統制が敷かれた当時の歴史を取り上げた。

同時に、近年になって、NHK、民放を問わず放送された「戦争」を題材とした様々なラジオドラマやドキュメント番組なども学生に聴いてもらった。8月6日の広島原爆の日、詩人のアーサー・ビナーさんが、被爆地を歩きながら放送した中国放送の「日々感謝」というワイド番組。盲学校の生徒が、その鋭い聴覚を活かして米軍機の大襲撃をいち早く知らせる「聴音兵」として駆り出されていく姿を描いたNHKのラジオドラマ「空の防人」。シベリア抑留者の体験を綴った山形放送のドキュメント「それぞれの異国の丘」などの作品である。それ以外にも、近年、ギャラクシー賞ラジオ部門で入賞したバラエティー番組、ワイド番組などを毎週の講義で聞いてもらい、毎回、それらの作品が学生の心に、どのように響いたかをレポートとしてまとめてもらった。それによつて、彼らのラジオに対する認識がどのように変わっていったのかを探ることができた。そこから見えてきた「大学生のラジオへの関わり方」について、以下述べることにする。

△受講学生のラジオへの見方の変化▽

この講義を受ける前、大半の学生のラジオ体験は、大変に乏しいものであった。「私にとつて、ラジオは遠い存在であった」「ラジオを一回も聞いたことはなかった」などの声に代表されるものが、圧倒的に多数を

占めていた。仮に聞いていたとしても、ラジオの大きな特性である「番組への参加性」「2WAYコミュニケーション」については、ほとんど実感が持てていないようであった。しかし、講義を通じて、様々なジャンルのラジオ番組に触れるにつれて、そうした見方が劇的に変化していく様子を感じ取ることができた。講義を通じて、スマホのアプリにラジオを入れて利用するようになった学生もいれば、ラジオの面白さを友人にも伝えたいと思ったという学生もいた。それでは、ラジオの何が、今の学生の心をとらえたのであろうか。一人の学生のレポートを引用してみたい。

『ラジオとテレビの違いは、声だけで伝えること、思い切りがあるところだと思う。そして、そこがラジオの魅力だと感じる。声だけということは、想像力が膨らむし、その声や語りに耳を傾けやすくなる。そして、思い切りというのは、面白ければいいという潔さを感じることもある。ラジオはどちらかと言えば、聴取率よりも聴き手に楽しんでもらうことを優先しているように思う。また、万人受けというよりも、本当に聞いている人に楽しんでもらおうという姿勢を感じ取ることもある。続けて聴くことで、更に面白さを感じることもある。ラジオを作る人たちの伸び伸びとした雰囲気や伝わるのも魅力の一つだと感じる。』（日本大学芸術学部2年の女子学生）

筆者自身も、ラジオ局で番組を制作している一員であるが、「思い切りのある番組を作

っているかどうか」伸び伸びとした雰囲気や伝えられているか」など、学生のレポートから、学ぶことも多い。

また、別の学生は、ラジオを聞いていて面白くないと感じる時として、「ラジオから一方的な語りや情報を与えられるとき」を挙げていた。この学生は、逆にラジオが面白いと感じる時として、「一方的なものではなく、聴いている側も一緒に番組を作り上げていると感じられるとき」と指摘し、これはどのジャンルの番組にも当てはまるのではないかと記している。

メールやFAXを採用していれば、聴いている側に一緒に番組を作っていると感じさせることが出来るのだろうか。ラジオが得意としてきたはずの2WAYコミュニケーションにも、より一段の工夫が求められるのかも知れない。

たかが、150名余りの学生の講義とはいえ、彼らと向き合うことで、今後もラジオの在り方を考え続けていきたい。(文化放送OB・日大非常勤講師)

忘れられない先輩の言葉

藤井正博

5年間の嘱託期間も完了し、41年間のニッポン放送での生活を終えて、はや半年。「どうですか、リタイア後は？」とよく聞かれるのだが、今もほとんど毎日ニッポン放送に出かけ、1日中編集室かスタジオに籠っている生活は、全く変わっていない。完全退職後も、制作部との業務契約で、退

職前の仕事や単発で特番などを制作させてもらったり、友人や先輩から「一緒に仕事しない？」と声をかけてもらって、ニッポン放送以外のラジオに関わる仕事もすることができ、むしろ退職前より忙しいかも知れない。65歳を過ぎて、高齢者と呼ばれる年齢になったにもかかわらず、これだけ仕事ができることを幸せに思うのと同時に、入社して以来お世話になった先輩や仕事を通して親しくお付き合いしていたという友人のおかげだと、つくづく思い、日々感謝している。

41年間のニッポン放送でラジオと関わる中で、仕事をする上での糧になった決して忘れられない先輩の言葉が三つある。

一つ目は、新入社員で何もすることがなく、ポツンとデスクに座っていた時「外へ出て来い。いろんなものを観て聴いて、たくさんの人に会って来い」という先輩の一言だった。百聞は一見にしかずではないが、自分の目で見て、自分の耳で聴くという第一体験、それが重要だ。季節感をはじめ、街の、人の空気感を掴むこと。番組を作る上で、大切にしなければならないことを、教わった。

そしていろんな人と会うこと、それが一朝一夕に仕事に繋がることではないかも知れないが、自分の大きな財産になり、いつか番組制作に還ってくるかも知れない。放送局はどれだけ人が集まるかで決まる、という教えは20年、30年と仕事をしているうちに初めて理解できたことだったが、これ

がニッポン放送の良き伝統であったのではないかと、今でも思っている。

二つ目は、同じく入社当時の直属の上司から言われた言葉「オレはお前という人間がどういう人間か分からない。一人の人間につけると、その人の良いところだけでなく、知らないうちに悪いところも覚えてしまう。だから敢えて複数の人につける。それぞれの人のやり方を見て、自分にあつたやり方を自分で考えて作り出せ」。結果、7人のディレクターのADをすることになった。入社した当時のニッポン放送はディレクター一人一人が一国一城の主で、最後の徒弟制度の時代だった。丁寧に教え、指導してくれる先輩ばかりではなく「黙ってみてろ」「バカやろう、何を見ていたんだ!」「どこでそんなやり方を覚えてきたんだ」と、怒鳴られたりばなし。だが、仕事が終わったあと、お酒について行くと、問題点その改善方法を話してくれる。とても良い人間関係だったと思うのは、年をとったせいだろうか。

7、8年前、編成で考査担当をしている時、ディレクター研修の際にこの二つの話をしたら、若いディレクターたちから羨ましがられた。これが、僕の思うニッポン放送の良き伝統であり、これはニッポン放送に限らず、全てのメディアに共通する良き伝統ではないかと思っている。

三つ目は、20年ほど前、事業でイベントなどを企画していた時、一緒に仕事していた制作時代からの先輩に言われた言葉「井

「オールナイトニッポン」70年代同窓会」実施報告

戸を掘った人のことを忘れてはいけない。昨年、小谷正一さんの番組を制作した時、小谷さんと仕事をした方の話や、小谷さんについて書かれたものを通して僕らが今やっていることは、小谷さんたちがゼロから作り上げたものの延長にあるのだと再確認し、先達への感謝の念を新たにしたい。物作りの世界で、伝統と技術の継承が大きな問題となっていると良く聞くが、それは物作りの世界だけではなく、我々メディアにも同じことが言えるのではないだろうか。

数年前、過去のアーカイブを聴く番組を制作した際、民放ラジオ創成期、そして全盛の昭和30年代、40年代の番組を聴く機会があった。玉石混交だったが、先輩ラジオマンの熱い思いが伝わる番組がたくさんあった。彼らも先輩から「バカやろう」と怒鳴られながらも、先輩たちのノウハウを学び、その上に彼らの新しい息吹を吹き込んで作り上げたものだったのだろう。

情報が溢れ、それが正しいかも判断がつかずネットの情報を鵜呑みにし、コピー・アンド・ペーストで済ませてしまう時代と世代に、それを伝えることがいかに難しいか、最近身をもって感じている。

かつて吉田拓郎が歌ったように、古い船を動かせるのは古い水夫ではなく、新しい水夫が乗り込んで行かなければならない。僕がこれからはすべきことは、先達から学んだものを伝え、若い次世代に任せ、その舵取りの方向を見誤らないようにガイドすることではないかと思っている。そうしてもらって僕も一人前になったのだから。(ニッポン放送OB・ANN担当D)

放送番組センターと共催の公開トークショー「人気番組メモリー」は6月13日横浜の情文ホールで開催されました。今回は初めてラジオ番組をテーマとして取り上げ、ニッポン放送の「オールナイトニッポン」(以下ANN)をクローズアップしました。

この番組は1967年の番組開始から48年の歴史を誇り、全国の深夜放送ファンに親しまれてきましたが、今回は特に団塊世代から団塊ジュニアまでの「深夜放送ファーム」を巻き起こした1970年代に焦点を当てました。応募は1080通を超え、当日の会場には70年代に青春時代を送ったリスナーをはじめ、ラジオファンが集まり、満員の盛況でした。

(登壇者)

斎藤安弘 (ラジオパーソナリティ
イルカ (シンガーソングライター)
つボイノリオ (タレント)

藤井正博 (ニッポン放送OB・ANN D)
(司会)

上柳昌彦 (ニッポン放送チーフアナ)

トークショーは途中で沢山の秘蔵音源を聴かせながら進行。参加者は懐かしい音と喋りの達人たちのトークを楽しみました。「70年代同窓会」にちなみ、まず司会の上柳アナのリードでスライドに映写された1970年代の出来事を振り返るところか

らスタート。初代パーソナリティの一人斎藤安弘さんの番組スタート時のエピソードが披露されました。

斎藤 若者向けの深夜放送は、TBSの「バツクインミュージック」が67年7月にスタートし、「ANN」が10月。喋るのも選曲もレコードを回すのも全部一人でやった。初めての試みだったので無我夢中だった。スタートする前の1965年頃文化放送の土居まさるさんが『真夜中のリクエストコーナー』と言う番組を始めたんです。アナウンサーらしくない画期的なしゃべりが人気を呼んで深夜放送が注目されるようになった。

イルカ 私はその頃まだ高校生だったかな。私の父はジャズマンで夜中に仕事から帰っ

てくると、両親そろって深夜のラジオを聞いてグラグラ笑っていた。私も勧められてそれを一緒に聞いていたんです。

斎藤 この時代はプロデューサーから「下ネタはやるな」と言われていた。ところが私の裏番組の「愛川欣也のバック」は「デトラ」とか

「じんじろげ」とかうまい表現で下ネタをやっていた。やられたと思った。

つボイ 私

は最初名古屋の東海ラジオの深夜放送を担当したんですが、「フリーセックス舌禍事件」を起こしてす

ぐ降ろされてしまいました。その後、出力5KWの岐阜放送でしゃべったりした後、憧れだったANNを担当することになった。私がニッポン放送に出入りするようになった1976年頃も「下ネタを絶対やるな」と言われてたけど鶴光さんなんかガンガン下ネタやっていた。ANNのチーフDの宮



イルカさん



つボイノリオ氏



斎藤安弘氏

本さんに会ったら「下ネタぜひやって下さい。裏番組に勝つにはこれしかない」と言ってきた。驚きました。

斎藤 私がANNをやめる時、公開スタジオで200人ほどファンが集まったけど土居まさるや野沢那智が来てくれた。そこで土居のセイヤング最終回には私が文化放送のスタジオにいつて出演した。放送局の垣根を超えたつながりがあった。

イルカ 私はラジオで初めておしゃべりしたのは文化放送でおしゃべりのうまいコタローさんのお相手だった。その後ANNのお呼びがかかって2時間一人しゃべるのは未経験だったので苦労した。落合恵子さんのようなおしゃべりなトークは無理なので「バカヤローコーナー」という企画をスタートしたら名物コーナーになった。沢山の応募はがきに何回も「バカヤロー」と叫ぶと喉が潤るものでつらかった。

藤井 入社当時は6人のディレクターのADをやっていた。徒弟制度の中で厳しい日々を送っていた。その先輩たちの教えがその後の仕事に結びついている。

ANNには毎週2万通もの投書ハガキが来て、選り出すのも大変だった。様々なミュージシャンと一緒に仕事が出来たのは幸運



藤井正博氏

だった。

(休憩の後、「災害時のラジオ」さらに「今後のラジオ」について熱く語り合いました。)

イルカ 東日本大震災の日に収録の為にニッポン放送に居たら大きな揺れが来て怖かった。でも上柳さんが生放送中で落ち着いた温かい声でリスナーに呼びかけていたので気持ちが落ち、……に安心を届けて、

上柳 大きな地震の後、必ず災害時にはラジオという話になるが、普段からラジオに接していないと伝わらないのではないかな。知らない声が喋っている耳には入ってこない。各ラジオ局は耳馴染みの声を作っておくべきだ。現在、街に出てリポートを担当しているが、人々には様々な事情があると実感する。そういう事情をくみ上げて紹介するのがラジオオダと思ふ。生放送というドキュメンタリーを続けていきたい。



上柳昌彦氏

ナーがそれぞれの経験や知識、感性を届けしてくれるからで自分はイタコの様な役割。深夜放送時代の経験が生きている。(4時10分終演)

終演後に寄せられた来場者アンケートに「懐かしい話を聞き青春時代を思い出しました。あの頃沢山の元気を与えて下さったパーソナリティの方々に、今更ながら心より感謝いたします。」「電リク、ターンテーブル等、昭和の時代に於けるラジオ制作のお話が聞けて貴重な記録として残りそうですネ」「ANN世代にとってはたまらなく貴重な時間でした。若返りました」等がありました。(田中秋夫記)

OLD TWITTER

戦争末期には建前の軍歌が廃れ、本音の兵隊節が好まれた。例えば「中尉中尉と威張るな中尉 中尉少尉の成れの果て」「伍長勤務は生意気だ 髭の軍曹は意地悪だ 古兵上等兵はきげんとり 馬より哀れな二等兵」「お国の為とは言いがた 人の嫌がる軍隊に 志願で出てくるバカもいる 可愛いスーチャンと泣き別れ」「イヤな所だよ軍隊は 金の茶碗に金の箸 仏様ではあるまいに 一膳飯とは情けなや ストロン」。これらはみな作者不詳だ。ラジオでも流さなかった。勤労動員学生の間でひそかに歌われた。ホンネをタテマエ化したがる政治権力には気の利いたホンネ節でからかうのもデダろ。権力のタテマエに対してタテマエでぶつける一方、ホンネで相手の露骨なホンネを暴く。それが後衛の智慧だ。(M)

第51回放送人句会

平成27年7月7日(水) 於：赤坂・表参道

出席：伊藤親郎 佐々木光政 新村もとを

西川阿舟 橋本きよし 林備後 森治美

不在投句：荻野慶人 山県ほん太

兼題：七夕、浴衣、紫蘇、三枚目(道化も可)

(業界用語)

道化師の化粧のままの昼寝かな 備後

浴衣着てまた脱いでみてひとりかな 備後

あたふたと踊浴衣で銀行へ 阿舟

ひよつとこの浮かれ囃子や夏神楽 ほん太

梶の葉や薄墨で書く女文字 ほん太

座長にも三枚目にも夏の冷え 備後

青紫蘇をばらりと田舎豆腐かな ほん太

浴衣着て夢の女首ほそき ほん太

浴衣は夜の底にあり紫蘇匂ふ 備後

浴衣なら腰骨に帯締めたまへ 阿舟

七夕は道化てみせるひと夜かな 治美

藍浴衣座して比叡ははるかなり きよし

樽に放つ紫蘇といふ香りの強さ もとを

七夕の願ひと握るビー玉と きよし

七夕や中に善からぬ願もあり もとを

あの人浴衣縫ひをり幾夜かな 治美

二枚目近き二枚目近き梅雨寒し 阿舟

六尺の男浴衣で朴樹下駄 視郎

汗の背に川風通る藍浴衣 きよし

紫蘇の蔭を狙う猫潜む 視郎

藍ゆかた川の流れに踊りけり 治美

道化りて夏の夜の夢幕上がる
七々や雨が無粋な横恋慕
宿浴衣着て久闊を叙するかな
洛北大原紫蘇の葉匂ふ頃
来ぬ人の浴衣羽織りて子守唄

慶人 光政 備後 もとを 慶人

裏庭の青紫蘇とりて具とせり
道化めき故郷の駅をサングラス
星今宵願ひごとなど最早なく
七々や母の短冊子らの幸
夏の夜の三番館のチャップリン
夏安居一枚目よりも三枚目
三枚目持て余しゐる夏座敷
七々や異口同音の笹揺れて
染めは褪せ糊も効きすぎ宿浴衣

阿舟 もとを 阿舟 光政 ぼん太 慶人 備後 もとを 慶人

第52回放送人句会

平成27年9月8日(水) 於:赤坂・麦屋
出席:佐々木光政、新村もとを、西川阿舟
林備後、堀川とんこう、森治美
不在投句:荻野慶人、山県ぼん太
兼題:初秋、風の盆、栗、脚光フットライ
ト(業界用語)

栗たわわ戦争知らぬ大人たち
栗ごはん母と並びし勝手かな
脚光が命縮めて女郎花
焼き栗やカルチエラタンの石畳
脚光の過去とてもなし秋遍路
白々と明けし小道を風の盆
道ゆるく越中おわら踊り行く

慶人 治美 とんこう 備後 ぼん太 治美 ぼん太

大琵琶の水に手浸す秋はじめ
靴下を脱いでまた履く秋はじめ
風の盆過ぎて胡弓の閑深し
風の盆草履の内股過ぎゆけり

もとを 備後 ぼん太 とんこう

毬栗落つブルドッグの鼻先へ
谷戸川の奔流となる初秋かな
初秋やひとりの飯は冷えてをり
菊人形脚光浴びてたぢろがず
アルバムの中の若き日秋はじめ
栗食みて苦き思ひ出忘れをり
脚光を浴びたるひとの秋拾
町辻に踊り子現れて風の盆
脚光と言ふもひとつの秋灯
初秋や大小屋掃除思ひたつ
せせらぎに和する胡弓や風の盆
一瞬の脚光に消え冷まじき
信濃路の栗は大粒艶めきて
貴奴なれ狼藉無残栗のいが
二人して列から消ゆる風の盆
フットライト探舞台に秋の暮れ
峠道初秋連れて歩くなり
すれ違ふ人も揃り足風の盆
濡れた手で栗飯レシピ練る厨
敗戦も歴史のかなた早や初秋

もとを 阿舟 備後 もとを 備後 阿舟 治美 備後 阿舟 備後 ぼん太 もとを ぼん太 もとを ぼん太 光政 治美 治美 治美 慶人

次回放送人句会

○平成27年11月10日(火) 18時頃から
○赤坂・麦屋 ○兼題:小春、神の留守、茶
の花、子役(業界用語)
☆特別選者として星野高士氏が見えます

書評にかえて

北のドラマづくり 半世紀



長沼 修 様

「北のドラマづくり半世紀」をお送りいた
だきありがとうございます。

テレビに関する本、あるいはテレビ制作
者の書いた本は数多ありますが、どの章に
も行間に至るまでこれほど熱い思いの籠め
られた本を知りません。いま、テレビが忘
れようとしているものをこのような形で世
に問うたこの意味は、テレビに関わる人
にとつて小さくないものと思います。その
長沼さんの魂とともに、民放テレビの原点
はローカル局にあること、そのローカル局
が形成してきたネットワークの意味が失わ
れようとしていること、などなどに改めて
思い起させる内容でした。

1969年、東京オリンピックの年。H
BC、CBC、ABC、RKB各社が制作
する企画がありました。企画会議のとき、
あるいは総括会議のとき、HBCの守分さ
んが「ロケポイントの向いの山にカメラを
あげた」という話をされて、それが手稲山
でしたか、「えっ、カメラを山にあげたんで
すか!」と驚いたことがあります。長沼

さんの本にも出てきますが、スタジオカメ
ラを山に運んでトライボット組み立てる労
力や、そして電源車、中継車をどこにどの
ようにセッティングしたかは知りませんが、
その「やる気」に感嘆しました。守分さん
は平然とにつくりしていたように思います。
そのときからHBC恐るべし、と思つたの
でした。

そのほか、素敵な話、良い話がいつぱい
出てきます。

その良い時代が終わり、テレビの世界に
は荒涼とした風が吹いています。どうして
そうなつてしまったのか、どうやってもそ
うならざるを得なかったのか、色々思つこ
とはあります。

しかし、テレビジョンの可能性がなくな
つたとは思えません。今の時代であればこ
そ、世界も日本も構造転換を迎えている時
代だからこそ、「世界のいかなる地点からも
同時に、より多くの人に伝える」というテ
レビの基本機能が大事であり、テレビの時
間性が状況への最も鋭利な批評であり得る
のではないかと思っています。長沼さんが
ドラマだけでなく広く制作に、そして経営
に関わられたことを次の世代の人々に伝え
ることで、テレビの現在の可能性が少しで
も根付いていくように思います。

ただ「面白かった」とだけ書くわけには
いかないメッセージがこの本にはありまし
た。

有難うございました。

前川英樹

会員名簿

2015.5.29 現在

【あ】 相本芳彦 青木裕子 秋田完 秋田和典 秋山豊寛 雨宮望 新井和子 【い】 池田正之 石井彰 石井ふく子 石橋映里 石橋健司 石橋冠 磯智明 磯野恭子 磯村健二 市岡康子 市川哲夫 市村元 一色伸夫 伊藤雅浩 井上佳子 井上良介 今井義典 岩澤敏 岩瀬弥永子 【う】 上田洋一 上村忠 浮田周男 碓井広義 臼杵敬子 内山洋道 宇野昭 【え】 江川雄一 江口展之 榎本恒幸 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】 大池雅光 大蔵雄之助 太多亮 太田昌宏 大西康司 大野秀樹 大原れいこ 岡弘道吉 緒方陽一 岡野真紀子 小川治 小河原正巳 沖野瞭 荻野慶人 尾田晶子 織田晃之祐 【か】 加賀美幸子 各務孝 片岡敬司 勝部領樹 葛城哲郎 加藤滋紀 加藤節男 加藤拓 加藤義人 金澤宏次 金沢敏子 金子登起世 金平茂紀 加納孝夫 川平朝清 鎌内啓子 亀谷弘美 鴨下信一 川喜田尚 川口健一 河邑厚徳 河村正一 【き】 北川泰三 北川信 北川祐美香 北出晃 北林由孝 北村美恵 北村充史 木村成忠 【く】 楠美昌 工藤英博 久保志穂 隈部紀生 倉内均 倉澤治雄 訓願圭 黒崎博 黒沢享 【こ】 小池勝次郎 河野尚行 小玉滋彦 後藤和晃 小山紳人 近藤一男 近藤邦勝 近藤晋 今野勉 【さ】 斎藤秀夫 斎藤寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江 桜井均 佐々木彰 佐々木欽三 佐々木光政 笹山正勝 佐藤敦 佐野有利 澤田隆治 沢田隆三 【し】 重延浩 重村一 重盛政史 静永純一 志津木敬 四宮康雅 柴田陽一郎 嶋田親一 清水満 志村一隆 下崎寛 下重暁子 白井博 【す】 菅野高至 菅野嘉則 杉澤陽太郎 杉田成道 鈴木昭典 鈴木俊樹 鈴木典之 鈴木道明 鈴木嘉一 須磨章 【せ】 関佳史 せんぼんよしこ 【そ】 曾根英二 【た】 高島秀之 高田宏 高橋練 鷹森泉 竹中一夫 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中秋夫 田中直人 田中則広 田原茂行 玉城朋彦 【ち】 崔銀姫 【つ】 塚本茂 辻本昌平 土屋敏男 つボイノリオ 露木茂 鶴橋康夫 【て】 寺島高幸 【と】 東城祐司 堂本暁子 戸田桂太 外崎宏司 豊田由紀子 豊原隆太郎 【な】 中尾幸男 中込卓也 中崎清栄 中島僚中 田中美知子 永田浩三 永田俊和 長沼士朗 永野敏一 中村敦夫 中村克史 中村季恵 中村耕治 中村敏夫 中村美美子 中山和記 並木章 【に】 新村もとを 西憲彦 西村与志木 西ヶ谷秀夫 西川章 仁田豊文 仁藤雅夫 二宮文彦 丹羽美之 【の】 信井文夫 【は】 橋本深 林健嗣 林安二 原由美子 原田令嗣 【ひ】 玄武岩 【ふ】 藤井チズ子 藤久ミネ 藤村忠寿 【へ】 逸見京子 【ほ】 星田良子 星野輝一 堀川とんこう 【ま】 前川英樹 牧之瀬恵子 松尾羊一 松平定知 松前洋一 黛りんたろう 【み】 三上義智 水上毅 水野憲一 南譲 三原治 三村景一 三村千鶴 宮崎洋 宮川鑛一 三宅恭次 【む】 村上光一 村上雅通 村上佑二 村田亨 【も】 本木敦子 諸橋毅一 門奈昌彦 【や】 八木康夫 矢島良彰 薮内広之 山鹿達也 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚 山田良明 山根基世 【よ】 横山英治 吉澤保 吉田賢策 吉永春子 吉村豪介 吉村直樹 【わ】 若松央樹 和崎信哉 渡辺浩平 渡辺紘史

【賛助会員】 日本民間放送連盟 TBSメディア総合研究所 融合研究所 日本ケーブルテレビ連盟

編集後記 ▼関東大震災（大正12年）の

あと、日常会話の中で「時局」というコトバが流行ったそうです。「なにせこの時局だからね」というだけで、互いに通じ合うやるせない空気に世の中が掩われたのでしよう。その先に「戦争」の時代が待っていました。夏の臨時会報のトーンが、「時局」を反映し批判性の強い内容になったのは、会のエネルギーの強さの表れだと思います。さて、平成のこの重大な時局がどう收拾するのか、戦争を直接知る老齢後衛世代には苦い正念場であるようです。▼日本が戦争をしない国となつて今年で70年。戦後日本の高度経済成長期に生まれた私には、「戦争は二度としてはいけないこと」「平和は何よりも尊い」という観念しかありません。学校の授業でも、先の大戦について詳しく教わった記憶はなく、実はテレビドラマや映画、ドキュメンタリー映像から得られる情報だけが私の知識といつても過言ではありません。「戦後生まれ」が0歳から70歳まで存在する現代では、多くの人々が放送を通じて戦争というものを知る……。様々な終戦記念番組を扱う放送メディアの責任の重さを、改めて痛感する今回の編集作業でした。（京子）▼戦時中の記憶は私と同世代の現在80歳の男性と女性ではかなり違う。シンガポール陥落の際山下奉文将軍が敵のパーシバル将軍に「イエスカノーか」と迫ったという話は男性のほとんどは軍刀を手に持った写真とともに鮮明に覚えているが、女性のほとんどには記憶がない。戦争

争のことをやめた男の子は取っ組み合つて「イエスカノーか」とやめたが、女の子はそんな乱暴な遊びはしなかったせいかな▼「マレー沖海戦の歌」も覚えていた女性はいない。「滅びたり滅びたり敵東洋艦隊はマレー半島カンタン沖に今ぞ沈み行きぬ」の「カンタン」は私の故郷の長崎訛りでは「クワンタン」英文表記はKWANTANである。勝った勝ったと喜んでいたのは男の子だけだったせいかな▼「放送人の証言」の校訂作業に皆さん苦勞なさったようだ。私も最初は要領がわからず苦勞したが、草創期のことを調べているうちに面白くなつて作業を終えた。この作業と戦後70年、8月の6日、9日、15日と昔にたつぷり浸つたひと月だった▼自宅のパソコンが熱中症になつた。使っていると突然電源が落ち、画面が真っ暗になる。メーカーにいろいろ解決策を聞き、試みたが、ダメ。廃棄して新品を買うことを覚悟して電源コードやUSBなどぐつついているものを全部はずし、一晩涼しいところに置くと直つていた。熱くなつたことが原因らしい。いつもバッテリーが熱くなるのだが、今年は連日の猛暑の中で酷使したので、熱中症になつたようだ。涼しくなつたのもう大丈夫だと思う▼質問があつたので答えますが、コラムのタイトル「羊翁妄語」は加藤周一の「羊の歌」と「夕陽妄語」にあやかったものです。加藤周一は羊年生まれ、松尾羊一さんは羊年生まれですが、ともに羊のように温和な性格のようです。（視郎）